

外国語活動における一人一台タブレット端末を使用した プレゼンテーションの研究

－異なる授業形態によるプレゼンテーション力・自己効力感・
自尊感情の変容に着目して－

Research about English Presentation Activity in which an own Tablet PC is
Used:
Focusing on how class arrangement affects Performance, Self-Efficacy and Self-Esteem

蜂谷 真穂^{*1}, 野崎 俊彌^{*2}, 北澤 武^{*3}
Maho HACHIYA^{*1}, Toshiya NOZAKI^{*2}, Takeshi KITAZAWA^{*3}

^{*1,2} 東京学芸大学教育学部

^{*1,2} Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

^{*3} 東京学芸大学情報科学分野

^{*3} Department of Technology and Information Science, Tokyo Gakugei University

Email: a151419g@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし：本研究では、一人一台タブレットを使用した外国語活動のプレゼンテーションを対象に、自分のプレゼンテーションを撮影して他者と振り返り、再びプレゼンテーションする授業と、他者の前で繰り返しプレゼンテーションする授業を比較分析した。結果、自分のプレゼンテーション動画を振り返る授業では、自分の考えや気持ちを英語でプレゼンテーションできるという自信に繋がることが期待できた。他者の前で繰り返しプレゼンテーションする授業では、伝わるようにプレゼンテーションをするというプレゼンテーション力に対する意識や、自己効力感、自尊感情が高まる可能性が示唆された。

キーワード：外国語活動、一人一台タブレット環境、プレゼンテーション、自己効力感、自尊感情

1. はじめに

小学校新学習指導要領では、外国語で自分の考えを表現し、プレゼンテーションする力が求められている⁽¹⁾。また、外国語活動では、相互評価など、他者との関わりを充実させることが重要である⁽²⁾。加えて、他者と自分のプレゼンテーションを映像で比較しながら振り返ることは、良い点や改善点の自己評価や自信に繋がる利点がある⁽³⁾。だが、一人一台タブレット環境がない場合、容易に自分のプレゼンテーションの様子を確認することが困難である。タブレット端末で各々のプレゼンテーションを撮影し、他者とプレゼンテーションを振り返る授業形態を導入すれば、プレゼンテーションに対する自信が高まることを期待できる。

そこで本研究では、一人一台タブレット端末を使用した外国語活動のプレゼンテーションを対象に、他者とプレゼンテーションの映像を振り返る授業と、他者の前で繰り返しプレゼンテーションしあう授業を比較する。その後、各々の授業の事前事後で、英語に対する態度、タブレットを使用した振り返りへの考え方、プレゼンテーション力、自己効力感、自尊感情がどのように変容するかを分析することを目的とする。

2. 調査概要

2.1 プレゼンテーションの映像を振り返る授業

一人一台タブレット端末で、自分のプレゼンテ

ーションを撮影して相互評価した後、再びプレゼンテーションする授業形態は、都内公立小学校6年生28名（男子：15名、女子：13名）で、2017年9月21日（木）第4校時に実施した。

2.2 繰り返しプレゼンテーションしあう授業

他者の前でタブレットを使って、繰り返しプレゼンテーションする授業形態は、2.1とは異なる都内公立小学校6年生25名（男子：12名、女子：13名）で、2017年10月30日（月）第1校時に実施した。

2.3 質問紙

授業の事前事後に質問紙を実施した。英語に対する態度、タブレットを使用した振り返りへの考え方、プレゼンテーション力、自己効力感、自尊感情に関する質問で、計26項目（5件法）とした。また、事後調査ではタブレットの振り返り活動における良い点と改善点についての自由記述を求めた。

2.4 分析方法

2つの異なる授業形態で、上述した項目の差異を分析するために、事前事後調査の回答結果を、二要因の分散分析（対応あり）で比較分析した。

3. 結果と考察

二要因の分散分析（対応あり）の結果、交互作用が認められた項目のみ報告する。

3.1 プレゼンテーション力

「自分の考えや気持ちを、英語でプレゼンテ

ョンすることができると思いますか ($F(1, 49)=5.58$, $p<.05$)」に交互作用が認められた。単純主効果の結果、プレゼンテーションの映像を振り返る授業実践の事前事後に有意差が認められ ($F(1, 49)=18.65$, $p<.01$, (事前: 2.54, 事後: 3.27)), Bonferroni 法の多重比較の結果、事後の平均値が有意に大きかった ($p<.01$)。自由記述では、「悪いところ良いところが分かり良いと思う」という回答が得られた。よって、タブレット端末で自分のプレゼンテーションを振り返る授業では、自分の良い点や改善点に気付き、自分の考えや気持ちを英語でプレゼンテーションできるという児童の自信に繋がる可能性がある。

また、「相手に内容が伝わるように、大事なところを強調しながら英語でプレゼンテーションをすることができると思いますか ($F(1, 50)=10.38$, $p<.01$)」に交互作用が認められた。単純主効果と多重比較の結果、繰り返しプレゼンテーションしあう授業実践の事前事後に有意差が認められ ($F(1, 50)=20.00$, $p<.01$, (事前: 2.88, 事後: 3.68)), 事後の平均値が有意に大きかった ($p<.01$)。自由記述では、「相手に伝わるように話す」「班の皆で何が良くて何が悪いのか話し合える」という回答が得られた。よって、繰り返しプレゼンテーションしあう授業では、内容が伝わるように英語でプレゼンテーションできるという意識が高まる可能性が期待できた。

3.2 自己効力感

「タブレットで自分のプレゼンテーションを振り返ることによって、英語を話す自信がつくと思いますか ($F(1, 51)=5.95$, $p<.05$)」に交互作用が認められた。単純主効果と多重比較の結果、繰り返しプレゼンテーションしあう授業実践の事前事後の事後に有意差が認められた ($F(1, 51)=12.85$, $p<.01$, (事前: 3.04, 事後: 3.60)) ($p<.01$)。繰り返しプレゼンテーションしあう授業で、他者からの評価を得ることに加え、振り返りによって自分自身で第三者の視点から評価が可能となるため、英語を話す自信に繋がるのではないかと考えられる。

3.3 自尊感情

「自分のプレゼンテーションに満足しますか ($F(1, 47)=10.99$, $p<.01$)」に交互作用が認められた。単純主効果の結果、繰り返しプレゼンテーションしあう授業実践の事前事後に有意差が認められ ($F(1, 47)=8.05$, $p<.01$, (事前: 2.76, 事後: 3.32)), 多重比較の結果、事後の平均値が有意に大きかった ($p<.01$)。かつ、異なる授業の単純主効果について、事後に有意差が認められ ($F(1, 79)=6.12$, $p<.05$)、プレゼンテーションの映像を振り返る授業実践 (2.67) よりも繰り返しプレゼンテーションしあう授業実践 (3.32) の平均値が有意に大きかった ($p<.01$)。

「自分のプレゼンテーションは、より良いものができる様々な可能性があると思いますか ($F(1, 51)=5.68$, $p<.05$)」に交互作用が認められ、単純主効果と多重比較の結果、繰り返しプレゼンテーション

しあう授業実践の事後が有意に大きかった ($F(1, 51)=4.56$, $p<.05$, (事前: 3.32, 事後: 3.72)) ($p<.01$)。繰り返しプレゼンテーションしあう授業では、これらの自尊感情の向上が期待できた。

「プレゼンテーションを通じて、自分の個性を大事にしたいと思いますか ($F(1, 51)=4.17$, $p<.05$)」に交互作用が認められ、単純主効果と多重比較の結果、異なる授業の単純主効果が有意で ($F(1, 81)=4.21$, $p<.05$)、プレゼンテーションの映像を振り返る授業実践 (3.18) よりも繰り返しプレゼンテーションしあう授業実践 (3.72) の方が事後に有意差が認められた ($p<.01$)。繰り返しプレゼンテーションしあう授業であると、他者のプレゼンテーションを見る機会が増えるため、プレゼンテーションを通じて自分の個性を大事にしたいと思うのかもしれない。

4. おわりに

本研究では、一人一台タブレット端末を使用した外国語活動のプレゼンテーションを対象に、自分のプレゼンテーションを撮影して他者と振り返り、再びプレゼンテーションする授業と、他者の前で繰り返しプレゼンテーションする授業を比較分析した。結果、自分のプレゼンテーション動画を振り返る授業では、自分の考えや気持ちを英語でプレゼンテーションできるという自信に繋がり、他者の前で繰り返しプレゼンテーションする授業では、伝わるようにプレゼンテーションをする意識や、自己効力感、自尊感情が高まった。

今後の課題として、特性シャイネス⁽⁴⁾や、賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求をもつ公的自己意識⁽⁵⁾の学習者特性による分析、プレゼンテーションの映像を振り返る授業と他者の前で繰り返しプレゼンテーションする授業形態を組み合わせた授業評価、児童の外国語不安に関する調査が重要である。

謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に感謝します。

参考文献

- (1) 文部科学省: “小学校学習指導要領 (平成 29 年 3 月公示)”, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf (参照 2018.1.30)
- (2) 廣森友人: “英語学習における動機づけを高める授業実践: 自己決定理論の視点から”, 外国語教育メディア学会機関誌, 43, 111-126 (2006)
- (3) 田中雅章, 神田あづさ, 大森晃: “動画の振り返りによるプレゼン技術向上の提案”, 第 9 回情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集, 109-114 (2012)
- (4) 相川充: “特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究”, 心理学研究, 62(3), 149-155 (1991)
- (5) 菅原健介: “賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自己意識の強い人に見られる 2 つの欲求について—”, 心理学研究, 57(3), 134-140 (1986)